

## 9月2日 年間第22主日

申 4:1-2,6-8 ヤコ 1:17-18,21b-22,27 マコ 7:1-8,14-15,21-23

### 1. ヤコ

v.21 「心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」

カトリック教会が“御言葉”あるいは“神のことば”と言うとき、それはキリストの福音のことであって、神はこれを“聖伝と聖書”によって教会に託されました(神の啓示に関する教義憲章 10)。この“神のことば”を正しく保持し、忠実に教えることは、特に教導職にとって際だって大切な務めの一つです。ミサにおける“公式な説教(ホミリア)”が司祭または助祭に保留されているのは、このような際だって大切な務めを強調するためであって、恵みを受けた信徒が“教話(プレディカチオ)”によって“神のことば”を人々に伝えることまでもが、禁じられている訳ではありません(カトリック新教会法典 766-767)。

使徒パウロはこの御言葉の伝承(παράδοσις)を伝えることを大切に考え、信者がこれに信仰をもって従うことを強く勧めました。「わたしがあなたがたに伝えたこと」(I コリ 11:23, 15:1)、「伝えた教え」(II テサ 2:15, 3:6)、「受けたこと」(フィリ 4:9)、「伝えられた教えの規範」(ロマ 6:17) 等々と表現されているものがそれで、その内容はキリストの福音の要約であって、イエスの生涯の諸事実とその神学的意味づけを説明するものであります。この伝承(παράδοσις)が最終的に福音書という形にまとめ上げられて、後の時代の人々はそれを聖書の中で読むことが出来るようになりました。

ですから“御言葉”とは単なる“役に立つ立派な教え”というようなものではなくて、私たちが「イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるため」(ヨハ 20:31)の福音のことなのです。ですから司祭の説教も、奉仕者の教話も、決して聖書から受けた私的な感想や意見を述べるようなものであってはならず、信じる者すべてに救いをもたらす“福音そのもの”を語るものでなければなりません。「御言葉を行う人になりなさい」(v.22)とは、「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい」(フィリ 2:12)、「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい」(I テモ 6:12)ということなのです。

### 2. マコ

v.8 「あなたたちは神の掟を捨てて、人間の言い伝えを固く守っている。」

イエスがすべてのユダヤ教の言い伝え(παράδοσις)を徹底的に拒否された理由を、私たちは正しく理解しなければなりません。それには、福音書を通して現在私たちに語っておられるイエスが、かつての“思い出のイエス”ではなくて、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)、「(今は)神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださる」(ロマ 8:34) 天

上のイエスであるということ、聖伝と聖書の証言を通して受け入れる必要があります。

使徒たちを通して神が教会に託された御言葉の伝承(παράδοσις)は、「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」(ガラ2:16)というものでありました。ですから福音書はここで、この御言葉の伝承(παράδοσις)をユダヤ教の言い伝え(παράδοσις)と対比させているのです。

使徒パウロの以下の言葉は、この福音書のテキストの当時の教会における実際的な説明でありました。

「あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もないのなら、なぜ、まだ世に属しているかのように生き、“手をつけるな。味わうな。触れるな” などという戒律に縛られているのですか。これらはみな、使えば無くなってしまふもの、人の規則や教えによるものです。これらは、独り善がりの礼拝、偽りの謙遜、体の苦行を伴っていて、知恵のあることのように見えますが、実は何の価値もなく、肉の欲望を満足させるだけなのです。」(コロ2:20-23)

### 3. 申

w.7-8 「いつ呼び求めても、近くにおられる我々の神、主のような神を持つ大いなる国民がどこにあるだろうか。またわたしが今日あなたたちに授けるこのすべての律法のように、正しい掟と法を持つ大いなる国民がどこにいるだろうか。」

「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエス」(ロマ8:24)こそは、この旧約の律法が目指していた目標(ロマ10:4)、律法の完成(マタ5:17、ロマ3:31)であります。私たちが旧約聖書を読むとき、主キリストへの信仰へと心に向けるならば、古い覆いが取り除かれて福音がそこに姿を現します(II コリ3:14-15)。

実際にはこの“キリストの方に向き直る”(II コリ3:16)ということが根本的に欠けている、原理主義的で律法的なキリスト教理解が、特に米国を中心に大きな勢力を占めていて、我が国でも“福音に覆いが掛かっている”(II コリ4:3)擬似クリスチャンが少なくないことは、インターネットの世界を覗けばすぐ分かります。

「人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」(マタ7:15) 私たちはキリストの血によって贖われ、罪を赦されたのですから、“古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着け”(コロ3:9-10)ようではありませんか。私たちの(将来の復活の)命は、キリストと共に神の内に隠されているのですから(コロ3:3)。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月9日 年間第23主日

イザ 35:4～7a ヤコ 2:1～5 マコ 7:31～37

### 1. マコ

v.34 「そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、“エッフアタ”と言われた。これは、“開け”という意味である。」

この「深く息をつき(ἐστέναξεν)」という言葉は、出来事の描写という点では、「嘆息し」(フランシスコ会訳)、「ため息をつき」(口語訳)なのですが、この同じ言葉を使徒パウロが使っている他のところでは、「うめき」(ロマ 8:22,26)、「うめいている」(II コリ 5:4)などと翻訳されています。

初代教会はここで、この人を縛っていたサタンと戦われるイエスを思い浮かべたに違いありません(ルカ 13:16 参照)。イエスは今は既に罪と死と悪魔に勝利して復活されましたが、地上の教会は今なおサタンとの戦いの中にあり(エフェ 6:12)、天上のイエスはこの教会のために執り成し続けておられる(ロマ 8:34)ことを確信しました。実に教会は、“神が、私たちの主イエス・キリストによってサタンへの勝利を賜る”(I コリ 15:57)終末的な信仰によって、「心の中でうめきながら」(ロマ 8:23)、旅を続けているのですから。

このテキストは、8:22-26の盲人のいやしのテキストと対になっていて、このテキストの方は五千人の給食から始まる物語りの結尾であり、8:22-26は四千人の給食の物語りの結びであって、両者ともイエスがかかり苦労していやしを行った様子が描かれています。恐らくそれはイエスのサタンとの戦いの激しさを思い起こすためでありました。

感謝の典礼の中で司祭は、“わたしたちの罪ではなく教会の信仰を顧み…… てください”という“教会に平和を願う祈り”を唱えますが、マルコ福音書はこの“教会の信仰”が人間の能力によるのではなく(エフェ 2:8)、神の賜物であり奇跡であることを語ろうとしたに違いありません。

### 2. ヤコ

v.5 「わたしの愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は世の貧しい人たちをあえて選んで、信仰に富ませ、御自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか。」

いつの時代にも、この“貧しい人たち”という言葉には、聖書の読者の心を惹きつける魅力があったようです。現代の私たちの教会でも、普通の信者の大部分は自分にこの言葉を当てはめて納得している傾向があるようです。

しかし、では、自分は信仰に富んでいるかということ、そのことには自信が無く、まして自分は神の国の相続人とされている(ロマ 8:17、エフェ 1:11)と本気で確信している信者は、たいへん少ないのです。それではどうして“神のことは”、“御言葉”、すなわち“キリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられた”(I コリ 1:30)ことを理解出来るでしょうか。現代の教会では実際、“約束された希望につい

て弁明できる”(Iペト 3:15)のような教導職も信者も、非常に稀なのです。

それにもかかわらず、“神のことは”を聞き、“栄光に満ちた、わたしたちの主イエス・キリストを信じる”(v.1)ことは、人間の能力によるのではなくて聖霊の御業であり(エフェ 1:17-19)、神による奇跡であることを、私たちは今朝の朗読配分を通して確かに聞かされているではありませんか。「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて」(ロマ 8:34)、現代の教会のために執り成してくださっていることを、神に感謝しましょう(ロマ 7:25)。

### 3. イザ

w.5-6 「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。」

今日イザヤ書という名で一書にまとめられているけれども、全く時代の異なる三つの文書を貫いている終末的な神の救済への期待が、ここにあります。イザ 35章は既に捕囚の背景を思わせる黙示文学的断片なので、後の時代の挿入であると考えられていますが、私たちはこの終末的救済の希望をイザ 42:7(第二イザヤ)、イザ 61:1(第三イザヤ)で、そして福音書ではその実現を聞くのです(マタ 11:5、マコ 7:37、ルカ 4:17-21、ヨハ 9:39)。

「今は悪い時代なのです。」(エフェ 5:16) 「見よ、闇は地を覆い、暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。」(イザ 60:2) 「今や…… 救いは近づいているからです。夜は更け、日は近づいた。」(ロマ 13:12) 「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」(Iコリ 15:57)

私たちは神の憐れみによって、信じない者ではなく、信じる者になろうではありませんか(ヨハ 20:27)。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月16日 年間第24主日

イザ 50:5～9a ヤコ 2:14～18 マコ 8:27～35

### 1. マコ

v.29 「そこでイエスがお尋ねになった。“それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。”ペトロが答えた。“あなたは、メシアです。”」

この信仰宣言が、教会がその上に建っている岩であり、十二使徒の筆頭者であるペトロの口に帰されているのは、原始教会の宣教の特性を示しているのであって、現代の私たちはこの特性を、“教会に委ねられた信仰の遺産”として理解することが大切です。

近代人は、信仰というものを私的で主観的な事柄と考えて来た傾向が強く、更にポスト世俗化時代と呼ばれる現代においては、そのような理解が決定的な *de facto standard*(事実上の標準)になったように見えます。しかしキリスト教信仰は本来、個人の主体的信仰であると同時に“教会の信仰”であって、この両面が常に健全な均衡を保っている必要があるのです。

この“メシア”という称号(ギリシア語でキリスト)が、直ちに「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)という救贖の事実と結びついて理解されねばならないことを、今朝の福音書は語っているのです。原始教会の宣教は、この“既に起こった十字架と復活の出来事”を前提にしていました(v.30)。イエスが処刑されたのは、当時のユダヤ人の敵意による歴史のいたずらではなくて、“わたしたちの罪のため”であったことを、「サタンよ、引き下がれ」(v.33)というイエスの鋭い叫びが証言しています。それは実に“私たち教会のため”の贖いの御業でありました。

どうか、カテケーシスの奉仕者にご注意願いたい。“私たちはイエス様に倣って犠牲的精神で人々に仕える者になり、ペトロさんのような失敗をしない立派なカトリック信者になりましょう”などと、子供たちに間違っただけを教えることのないように。

### 2. イザ

v.6 「打とうとする者には背中をまかせ、ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」

これを十字架のイエスの「自分を無にして」(フィリ 2:7)、すなわち死に至るまでの卑下(κένωσις)として理解することを、原始教会は教えました。それは「わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるため」(1ペト 2:24)の、神の愛の業であったからです(ヨハ 3:16、1ヨハ 4:10)。

原始教会が“互いに愛し合う”ということを経験の第一の徳と考えたのは、“聖徒の交わり”というものを、互いに「キリストはその兄弟のために死んでくださったのです」(ロマ 14:15)という意味で理解したからでありました。御子イエスが私たちの罪を担って死んでくださったのであって、決して使徒が、あるいは諸聖

人が贖罪の十字架につけられたのではない(Ⅰコリ1:13)ということ、現代の私たちは明確に理解しなければなりません。

キリストの模範(ヨハ13:15、フィリ2:5、Ⅰペト2:21)ということ、信者一人一人が“小さなキリスト”になるという形で理解することも、教会では古くからの習慣になっています。しかし、人はどんなに信仰深くても、キリストの贖罪の十字架の代理を果たしたり、あるいは少しでもそれを補うようなことは出来ないのです。ただ神の子イエス・キリストお一人が、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。」(ヘブ9:12) 御子による十字架の赦しがある以上、“罪を贖うための他の供え物”は全く必要でも、また可能でもないことを知しましょう(ヘブ10:18)。

### 3. ヤコ

v.17 「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」

ヤコブの手紙は現代の私たちに、“あなたの信仰には行いが伴っていますか”と問いかけています。宗教改革者たちが“信仰によって救われる”ということ、を強調したのは、正しいことでした。私たちが理解しなければならないことは、その信仰は決定的に、上記の問いかけと結びつけられているということです。プロテスタントでもカトリックでも、多くの信者はこの点で余り深くは考えていないのが実状です。

世界中どこでも、キリスト教の諸教会はいろいろな奉仕や慈善活動、さらには社会活動を活発に行って来ました。たとえば自分たちの小教区のことを考えてみましょう。信者の多くが、何らかの形でそのような奉仕や活動に関わっています。しかしそのような“行い”には、贖罪者イエス・キリスト(ロマ4:25)への“信仰”が伴っているでしょうか。もしそれが正しい信仰を伴っていないなら、それらの“行い”は、ただの人文主義的な“善意の奉仕”でしかありません。

私たちは今年間もなく始まる“信仰年”に向かって、教皇から“主が与えてくださったこの霊的恵みの時に、信仰という貴いたまものをわたしとともに思い起こしてください”と呼びかけられています。主はヤコブの手紙を通して私たちに、“あなたの行いには信仰が伴っていますか”と問いかけてくださっているのです。私たちはそのことを今朝、感謝のうちに聞き取ろうではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

## 9月23日 年間第25主日

知 2:12,17-20 ヤコ 3:16~4:3 マコ 9:30~37

### 1. マコ

vv.31-32 「それは弟子たちに、“人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する”と言っておられたからである。弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。」

共観福音書によると、イエスは三度御自分の死と復活を予告しておられます(10:32-34 参照)。主の死と復活によって約束の救いが実現したとき(ロマ 1:2-4)、この主の地上における歩みを正しく“福音として”理解する鍵が、まさにこの受難と復活の出来事にあることを使徒たちは理解したのでした。そして聖霊は、使徒たちをこの福音の証人また宣教者としてお立てになりました(ヨハ 20:19-23、使 1:8)。

現代の私たちが福音書を読むとき、それが、「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力である」(1:16)という、使徒たちの宣教の実りであることを、大前提にして理解することの大切さを知る必要があります。

vv.33-37 では、謙遜の問題(v.35)、子供あるいは小さな者の問題(v.37, 9:42)、そしてお遣わしになった方を受け入れるという問題(v.37、マタ 10:40)が取り上げられているのですが、それらを総括する主題が「わたしの名のために」(v.37)であることは明らかです。そしてそれは“死んで、否、復活して神の右に座っておられる”キリストの御名であることを(ロマ 1:5, 8:34、使 4:12)、私たちキリスト者は決して忘れてはなりません。

あなた方は、「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ 1:7)、“自分は洗礼によって、キリストと共に葬られ、キリストと共に復活させられた”(コロ 2:12)、「わたしたちの本国は天にあります」(フィリ 3:20)ということ、今は分かっている聖なるキリスト者として、福音書に耳を傾けなさいと、使徒たちは現代の教会に向かって語っているのです(v.32)。

世間では、人は教師に教えられて一人前になると、その能力に応じて業績を積み上げて行きますが、その恩師はただの尊敬する過去の人になってしまいます。感謝し尊敬してはいるけれども、今は自分の身につけた能力で新しい道を開いて行きます。福音書のイエスも、久しくそのように考えられて来ました。イエスは博物館の中に展示された過去の偉大な教師になり、そして福音書のイエスの言葉、「わたしの名のために」は重視されなくなりました。

しかし、このイエスは今や復活して生きておられ(ルカ 24:5-6,23)、やがて来られる方(黙 1:8)であり、“聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会”はこの“キリストの名のために”存在するのです、私たちの共にささげるミサで毎回、聖書朗読台と祭壇に臨んで会衆と出会ってくださるのは、この生けるキリストに他なりません。

## 2. ヤコ

「ねたみや利己心」(v.16)、「(心の)内部で争いあう欲望」(v.1)という言葉は、道徳的にレベルの低いことと考えるのが、近代人の価値観であったように思われます。実際、他人を裁くのにこんなに便利な言葉はありません。

「御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました」(1:18、エフェ2:4-6)、「心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます」(1:21、ロマ6:8-11)という大きな枠の中で、ヤコブの手紙は具体的な細事を述べているのです。細事に気を取られて大枠を見失ってしまうと、人は“神のことば”を聞き損じてしまいます。

## 3. 知

この朗読テキストも、「彼らはこう言い合うが、その考えは誤っている」(2:1)という“神を知らない者の人生観”という大枠を知らないと、そこから“神のことば”を聞き取ることが出来ません。

心ある信者はミサに出かける前に、先ず当日の朗読聖書を、その前後関係を含めて学んでおかなければなりません。この点で、国際ミサに参加する当日の外国人朗読者は、みな事前によく準備しているのが分かりますが、日本人朗読者の場合には、ほとんど何も準備していないのが“見え見え”である場合が多いようです(ミサの聖書朗読使信 55 参照)。

更に聖書全体に対しても言えますが、特に旧約聖書に向かうとき、キリストの福音をよく理解してそれを前提にして読まないで、キリスト者にとって一番大切な“神のことば”を聞くことが出来ません(ヨハ5:39、ロマ4:25)。

「わたしの名のために！」(マコ9:37) そうです。そのことを第一にすることを学ぶキリスト者だけが、感謝のうちに詩編119:105の賛美の言葉を歌うことが出来るのです。

「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯。」

アーメン、ハレルヤ。



## 9月30日 年間第26主日

民 11:25～29 ヤコ 5:1～6 マコ 9:38～48

### 1. マコ

v.41 「はっきり言っておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

この「キリストの弟子」という表現は、恐らく初代教会で用いられていたものであって、イエス自身は元々は「わたしの弟子」と言われたと推測されます。イエスがこの言葉や、「わたしの名を使って」と言われたとき、恐らくそれはヨハネ福音書に見られる「わたしの内におり」(ヨハ 6:56, 14:20)と同じ意味であり、それがヨハネでは「御子と結ばれている」(5:12)、「御子イエス・キリストの内にいる」(5:20)という表現になっていくのです。

つまりそれは、単なる形式的な名称ではなくて、間もなく使徒パウロが頻繁に使うようになった「キリスト・イエスに結ばれて」(ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ / ロマ 6:11, 8:1)という、キリスト者の信仰的かつ終末的な姿を思い浮かべる呼称でありました(1ペト 1:5)。キリストを信じて洗礼を受け、終わりの日に神の国に復活する(ヨハ 6:54)「キリストと共同の相続人」(ロマ 8:17)となった、という理解から切り離しては、「お名前を使って」(v.38)、「わたしの名を使って」(v.39)という言葉は考えることの出来ないものであったに違いありません。

西欧のキリスト教の歴史は、ある地域の住民がキリスト教のどの“派”に所属するか(あるいは所属させるか)の争いの歴史であった、とすることが出来ます。そしてその争いはついに新天地アメリカで“合衆国憲法による政教分離”という実を結びます。それは“各州や各コミュニティこそがどの宗派を選択するか決定権を持っていて、連邦政府はこれに口を出すことは許されない”というものです。私たち現代のキリスト者も、キリスト教あるいはカトリックを“所属”の概念で考えて、「キリスト・イエスに結ばれて(ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ)」という信仰的実態にはほとんど無関心でありました。

しかし今朝、この福音書を通して「必ず報いを受ける」と語っておられるキリストは、復活して神の右の座に着いておられる“生けるキリスト”なのです。私たちは本当に“わたしたちの内におられるキリスト”を発見して、小さな奉仕(一杯の水)をささげているでしょうか。それとも、ただ“小さな一人一人の中に、キリストはいる”(典礼聖歌 400)ということにして、キリスト教的諸活動に盲目的に参加しているだけなのではないでしょうか。それでは「片手になっても」(v.43)、「片足になっても」(v.45)というたいへんな犠牲を払ってさえも……と言われている“命を得”、“神の国に入る”「報いを受ける」ことが出来るでしょうか。

### 2. ヤコ

前回、ヤコブの手紙が具体的な生活上の細事を述べている、その大枠に言及しましたが、今朝のテキストも直ちにそれに続いて、「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい」(5:7)、「主が来られる時が迫っ

ているからです」(5:8)と述べられていることに、注目しなければなりません。

実際、聖書は巨大資本に対する労働者の階級闘争のためにも、搾取や疎外という社会的不正義との戦いのためにも、しばしば利用されて来ました。確かに現代世界には、「自分の心を太らせ、正しい人を罪に定めて、殺した」(v.6)という不義が満ちているのです。ですから、そのような闘争や戦いが持つ重大な意義を、教会が無視してよい訳ではありません。

しかし、ミサの“ことばの典礼”で、聖書を通して私たちに語っておられるキリストは、「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられ」(ヘブ9:12)、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙1:4,8)であることに、現代のキリスト者は目覚めなければならないのです。そのことに盲目で、単に「この世のことしか考えていない」(フィリ3:19、コロ3:2)なら、その人にとっては「福音に覆いが掛かっている」(1コリ4:3)ことになります。

### 3. 民

v.29 「わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。」

かつてモーセは言いました。今朝、天上のキリストは私たちがこの旧約聖書の一節を再び思い起こし、今度はこれをキリスト御自身の言葉として聞くことを求めておられます。私たちが“キリストの名のために”共に働く(一杯の水を飲ませる)ことの出来る、そのような信仰の仲間を見つけ出すことが出来ますように。

アーメン、ハレルヤ。